

風土記の丘の花だより¹⁷¹

今、そしてこれから見られる植物(2023年2月4日)

早いもので、もう立春ですね。暦の上では春ですが、まだまだ寒い日が続きます。今回も花らしい花は見つかりませんでした。「花だより」というにはいささか無理がありますが、なんとか4つ紹介することにします。



これはウラジロチチコグサのロゼットです。ロゼットとは、ご承知のとおり、草が冬を越すために、背を低くして風をしのぎ、日光をたくさん受けるために地面にはりつくようになった姿のことです。この草は、外来植物で園内の至る所に生えています。名前のとおり葉の裏が白いので、分かりやすいですね。キクの仲間でありがちな、花びらのない花を咲かせます。(それを、花が咲くというのでしょうか?) 人にとっては厄介な草ですが、こんなに健気に冬を耐えているのを見ると、応援してやりたくありませんか。



道を歩いていると、こんなものを見かけませんか? 白っぽくて1センチほどで、たてに何本かの溝が刻まれた種のような、木の実のようなものです。これはセンダンの種子です。初夏に薄紫のきれいな花を付け、秋には実が黄色く熟します。その種子がこれです。鳥が食べて糞に混じって排泄されたり、そのまま落ちて果肉が腐って種子だけ残ったりしたものです。昔は「あふち」と書いて「おおち」と呼ばれていました。南方熊楠の「天井にあふちの花が咲いている」の逸話は有名ですね。



もうオオイヌノフグリが咲いていました。これは梅園の周辺で撮りました。まだ寒いからか、パカッとは開いていませんが、たしかに独特の青い花びらが見えています。この草も外来植物ですが、もうすっかり日本の風土にとけ込んでいます。この花が咲くと「春が近いんだなあ」と思う人も少なくないと思います。近くにはコハコベの白い花もさいていました。寒いとはいえ、さすがに立春、春に近づいているのですね。



最後はタブノキの冬芽です。だんだん色づいてきました。これからますますきれいになっていくことでしょう。ピンクというか、紅色というか、赤紫というか、とにかく鮮やかな色に染まっていきます。タブノキはクスノキ科の常緑樹で園内のあちこちで見ることができます。葉や実はそれほど観賞に値するものではありませんが、つやつやした葉がきれいなので、街路樹としてもよく植えられます。 松下